

第16回

「大いなる好奇心と創造（想像）力をもって」

日本エヌ・ユー・エス株式会社
技術理事 川村 始



2018年6月より弊社の技術理事としてご指導頂いている川村理事に、本社でお話を伺いました。「川村塾」と呼ばれる社内の水産法令に関する勉強会では、まず漁業の発達史について、「漁」は太古の昔からの変わらぬ営みであるとして、大宝律令の話から始まりました。川村理事の知識の深さのルーツ、趣味のことなどをお尋ねしました。

一出身地はどちらですか。

戦後、父親が近江八幡から就職のため上京して住み着いたのが川崎市多摩区生田で、この辺りで生まれ育ちました。里山を切り開き住宅地として開発された地域で、私が子どもの頃はカブト虫を段ボール箱に山のように採っていたほどです。長十郎梨の産地で、当時はまだ田んぼや梨畑がたくさんありました。

一子どもの頃に興味をもっていたことは。

生物系に興味があり、庭にジャガイモを育てたりしていました。将来、農業試験場で研究をしようかと思うような子どもでした。母親が結婚前に小学校の教員をしていたこともあり教育には熱心でしたので、どちらかと言えば理系に興味がありましたが、どの教科もバランスよくこなしていたと思います。

風邪をひいて寝込んでいるときなど、「ファール昆虫記」や「シートン動物記」の子ども向けのシリーズ本を必ず読み返していました。ファールは自然観察でシートンは動物を擬人化してストーリーがありますが、どちらかと言えばファールの方が好みでした。

その頃は、工作も好きで、科学雑誌の付録が楽しみでしたし、父親に秋葉原に連れ行ってもらいラジオの

部品を買って組み立てたり、凧を工作したりして遊んでいました。

一その後、興味をもっていたことは。

大学を受験する頃、北海道大学の馬術部の様子をテレビで見ました。札幌にある大学の構内に厩舎や馬場があり、構内を馬で散策する情景に憧れました。

球技などの運動は苦手でしたし、もともと体育会系ではありませんでしたが、馬術の魅力にひかれ、大学に入学したらどの大学に行っても、馬術部に入部しようと考えていました。

一水産を専攻したきっかけは。

東京大学の理科Ⅱ類に合格し、二年で専攻を決めるときに、もともと生物系に興味があったことや父親と釣りに行っていたことなどが関係していたのかもしれないが、駒場で聴講した水産の講義が面白く感じられ、水産学科を選びました。

水産学科では、何と言っても資源が基本との思いから、能勢幸雄先生の講座に入りました。

当時能勢幸雄先生が教授で、清水誠助教授、谷内透助手、松下克己助手という構成で、東北のサケ、東京湾の資源・環境、サメ類、鮭子の底魚資源などを研究していました。私は、谷内先生から指導を受け、鮭子の底引き網漁業やその漁獲物のひとつであるユメカサゴの生態について学びました。

一水産行政の役人になったきっかけは。

大学院一年の時に公務員試験を受け上級甲種（水産）に合格しました。大学を卒業したばかりの時は、就職を考えていたのですが、「本当に職業として研究がやりたいのか」と考えなおしてみました。自分として

はむしろ行政職公務員として水産行政にたずさわることが向いているのではないかと考え、大学院を中退して水産庁に入庁しました。公務の大切さに、魅力を感じたのかもしれませんが。

一どのような仕事を担当されたのですか。

昭和56年4月に水産庁の漁場保全課に配属になりました。貝毒や赤潮の問題を担当しました。その後、昭和60年からの開発課栽培漁業班の企画係長時代には、京都の水産試験場の実施したトリ貝の養殖の技術開発に関わりました。現在、トリ貝が京都府の特産品にまで育っていることを嬉しく思っています。

昭和61年には国際課に移り、日ソ漁業交渉を担当しました。本格的200海里時代を迎えた中での協定改定直後で、毎年のように割り当てが減らさせる時期であり、交渉後の減船予算要求なども担当して大変忙しかったです。まだパーソナルコンピューターの普及する前の時代で、色々なパターンの予算要求案を電卓片手に手計算していたことが思い出されます。初期のワードプロセッサをモスクワに持ち込み、議事録の清書が飛躍的に効率化したことも、今のPC技術からすれば隔世の感があります。

その後、2〜3年ごとに異動があり、養殖、沖合底びき、水産加工、沿岸資源調査などを担当し、平成12年に当時の国際協力事業団（JAICA）、平成14年に石川県に出向しました。平成17年には水産庁に戻り、沿岸沖合課で「もうかる漁業」の仕組みを構築しました。沖合底びき班時代に、北海道の沖合底びき網漁業の基地ごとの戦略を、今回は東京、今回は札幌という具合で何度も何度も議論したことが印象に残っています。釧路の生スケソウダラの韓国輸出などのアイデアが生まれました。テニスの大坂なおみ選手のおじい様が論客であったことを懐かしく思い出します。

平成25年には東南アジア漁業開発センター（SEAFDEC : Southeast Asian Fisheries Development Center）に派遣され、バンコクで3年過ごしました。日本と東南アジア10カ国が加盟する水産分野に特化した国際機関で、もともと日本の水産分野のODA予算で運営されていた組織です。近年は日本に加え、UNEP・GEFなど国連系機関や、スウェーデンなど欧米の国の予算も受け入れ、東南アジア

各国のキャパシティービルディングを中心に活動しています。ASEAN（東南アジア諸国連合）との関係では Technical Arm として位置付けられており、SEAFDEC で原案を作成した施策を ASEAN として採択する仕組みの確立に取り組みました。IUU 漁業対策のガイドラインや漁獲証明システムの原型が採択されて、具体化のための実務が継続されています。CITES などの国際会議における、ASEAN としての統一スタンス作りなども重要な活動でした。

水産行政は幅が広く、異動の都度、新しい事柄を担当しました。そのたびに新たなことを勉強する必要があり、継続して勉強してきました。

一迷える若い人にひとこと。

今、振り返って考えてみると、「動かなければ、出会えない」と言うことでしょうか。この言葉は、絵手紙の先生である小池邦夫の名言ですが、ある程度、積極的に自分から行動を起こしていくことが大事だと思います。

それから、心掛けてほしいことは、「大いなる好奇心と、創造（想像）力をもって」ということです。創造と想像の両方が大事だと思います。知らないことは勉強すること。また、すべてを知ることはできませんので、類推し想像することも大切です。

一趣味について教えてください。

東京大学に入学してから馬術部に入部しました。北海道大学と違い馬場がキャンパスから遠く離れた三鷹にあり、通うのに時間が掛かるため、勉学のことを考え一年でやめてしまいましたが、水産庁に就職してから役所の馬術部に入りました。中障害飛越競技に出場することもありました。日ソ漁業交渉で仕事が忙しくなるまで続け、その後は近所の乗馬クラブに所属しました。

馬術を休んでいる間、基礎体力維持のためジョギングを始めました。霞ヶ関に勤務している間は、昼休みに皇居を一周していました。もともと体育会系ではないのですが、いつか馬術を再開するとの思いで、継続して体力づくりをしていました。

マラソンを始めたのは、平成14年に石川県に単身赴任したときからです。その頃は、10キロのミニマ

ラソンに年4回程度出場していました。石川県七尾市和倉のマラソン大会では殻付きのカキが完走の景品で、ゴールの後、大会会場に準備してある炭火で焼いて仲間と食した楽しい思い出があります。

フルマラソンに挑戦したのは、東日本大震災のあった平成23年秋の湘南国際マラソンからです。快晴の海岸通りを走る爽快さは応えられません。もっとも初マラソンの後半は苦行でしたけれど。

平成25年からバンコクに単身赴任していたときに「バンコク走遊会」という在タイ国日本人会のマラソン部に所属していました。当時、タイではマラソンがブームになり始めた頃で、毎週のように大会に出場していました。その頃55歳～59歳の年代別で獲得したトロフィーが沢山あります。



バンコクのマラソン大会で獲得したトロフィー



「バンコク走遊会」のユニフォームで表彰式に臨む

現在の新宿オフィスではお昼休みの皇居ランニングは出来なくなりましたから、今は夜に走っています。RUNNETという日本最大の走る仲間のポータルサイトで、全国のマラソン大会の記録を集計して年齢別ランキングを発表しています。昨年6月に『ランナーズ』という雑誌に発表された2017年度ランキングでは、男子59歳の部で61位でした。昨年6月には還暦の挑戦で柴又の100キロマラソンに出場して完走し、60歳台で2位でした。これからの目標はいかに走力を維持するかですね。

その他の趣味としては、絵手紙があります。しばらく中断しているので再開したいと思っています。また、五十の手習いで始めたビオラの演奏も継続していきたいと思っています。こちらは未だに楽譜が読めない、音程が合わない、リズムがとれないの三重苦を脱していませんが。

(編集後記)

「もともと体育会系ではない」とお話される川村さんですが、マラソンで男子年齢別で全国61位の好成績とのこと、敬服いたしました。お話の面白さ、考えの深さなど、大いなる好奇心の賜物と、それを実行できる意志とが生まれながらの素質を基盤として展開しているように感じました。JANUSの技術理事として、引き続きご指導よろしくお願い申し上げます。

2019年2月